【やなぎだ植物公園】

四季折々の花を咲かせる園内には、天体観測・プラネタリウム「満天星」をはじめ、アストロコテージもあり宿泊可能。

またカフェ＆レストランではブランド肉を使った「能登牛ステーキ」などのメニューをはじめ、能登町の美味しい料理を味わうことができる。

# 観光施設の多様な活用の可能性

能登町やなぎだ植物公園は、町営の施設で「能登らしさに出会える花と緑と星空のパーク」として、約30ヘクタールの総面積（内18ヘクタールが自然林）に、桜４種６２０本、花菖蒲60種10万株など、生態別に分類整理された植物園が遊歩道によって結ばれています。

また、星の観察館「満天星」にはプラネタリウムや口径60センチメートルの反射望遠鏡を備えており、この天文施設で４つの小惑星が発見されています。

開業は昭和61年で現在は合同会社能登みらい創造ネットワークが指定管理者として、管理運営しています。

開業の目的は、観光であったが能登半島地震を経て、その役割が近隣自治体住民の癒やしの場としても活用されるようになったようです。言うまでもありませんが地震発生時には、その広大な面積を活用し、避難場所としての機能を果たしていました。

現在は、様々な教育を体験する場としても活用され、木育、食育、星育などの最も充実した施設として、認識されています。

令和２年４月から管理運営を行っている能登町の合同会社能登みらい創造ネットワークの代表から、運営についてのご説明をいただきました。

最も印象的だったのは、コロナ禍での引き継ぎの苦労や震災発災時の計画を遂行できなくなってしまったことへの絶望的な心境から、一転して希望へと変えていく様々な出来事を聴くことができたことです。

元々、天体観測施設などがあったり、能登の自然が十分に盛り込まれている施設であるのに活用されていないことに目を付けていた現代表が、その活用計画やそれによって集客も採算性も計算できると考え、指定管理を受けるための法人を立ち上げたとのことでありました。

もちろん、震災発災時には、観光場所としては活用されないであろうと考え、避難場所としての役割を考えていたようですが、それによって、それまで来たことのなかった人が来るようになり、震災前より、活用人口、関係人口が増えることとなりました。

さらにＳＮＳの活用によって、輪が広まり、待ち合わせ場所として活用されるようになるなど、地域のランドマークとしての地位を確立しています。

現在は11月15日に新たな施設が誕生したり、様々なイベントが開催されるなど、住民に愛される公園としての活用を広げています。

（産業建設常任副委員長　植西（うえにし）　浩一（こういち））

金沢市農産物ブランド協会

城下町金沢には、藩政時代から受け継がれた季節感に富んだ特産野菜、加賀野菜が数多く引き継がれている。

消費宣伝や販売促進活動等をとおして、金沢市農業の発展のため、各関係機関が協力して金沢市農産物ブランド協会を設立し、加賀野菜の生産振興や消費拡大に努めている。

# 特産品を未来へつなぐ ブランド化と流通強化

金沢市農産物ブランド協会では、その持続性の工夫やブランド野菜の現状と未来について、お話を聴くことができました。この協会は「加賀野菜」「金沢そだち」という２つのブランド野菜を守り、育てることを目的として設立されました。

加賀野菜は、加賀れんこん、加賀太きゅうりなど15品目を認定し、また金沢そだちでは、金沢の風土を活かして生産された、優れた品質や豊富な生産量を誇る多くの農産物があります。その中で、だいこん、すいか、なし、トマト、きゅうりを生産する農家を認証し、その中でも優秀な条件を満たしたものだけに「金沢そだち」と表示して、販売しています。特定の販売店で戦略的に品質や価格を維持しています。

しかし、野菜を育てる環境が変化している中での維持は困難を極め、一部の品目について、すでに一軒の農家だけで作られているものや、都市化が進む金沢市の農地が宅地として分譲され、適した農地の確保も課題となっていました。環境の変化にはいくつかありますが、まずは気候の変化です。温暖化により、春先の高温が苗の生育に適さなくなったり、夏の高温による病害虫が発生しているケースもあり、そのような中で苦労した農産物も価格転嫁できず、跡継ぎがいても育てやすく儲けのある品種に移行するケースが多く、生産品目の偏りが著しくなっていました。

さらに6次化や販売チャネルの多角化については検討中であり、特に生産ロッドが減少傾向にあるものは諦めざるを得ない現状でした。

また、生産量の多い品種については、これからも多角的な活用方法を考え、農家の収入につながるよう研究を続けているとのことでした。

野菜のブランド化には、その成育環境に合った最適な成育方法を開発、研究しなければならなく、非常に時間のかかるものです。そして、その成育方法が確立したとしても気候などの環境が変ってしまっては、安定させるのにさらに時間を要することでしょう。

比布町には幸いにして、農業試験場があるため、開発研究には一定の基礎を見いだすための施設が揃っています。

冬いちごなど、閉農期の収入につながり、なおかつ収入を増やすための研究費用や期間を惜しんでいては、良いものがなかなか育たないように感じました。

以上、石川県での視察を今後の比布町のまちづくりに活かして、発展を遂げられるようつなげていきたいと思います。

（産業建設常任副委員長　植西（うえにし）　浩一（こういち））

【石川県金沢市の概要】

城下町として栄え、加賀友禅や金沢箔、九谷焼などの伝統工芸や、能楽や加賀万歳などの伝統芸能が受け継がれている。

日本の三名園の一つである兼六園や、金沢城、武家屋敷など様々な観光名所もあり、伝統文化と美しい景観を今に受け継いでいる。